

面接試験の概略

■ 面接試験で何を評価するか

近年、「人物重視」を掲げた教員採用候補者選考試験において、最も重視されているのが「面接試験」である。このことは、21世紀を展望した我が国の教育の在り方として、「新しい学力観」の導入や「個性重視」の教育及び「生きる力」の育成等、次々と新しい試みが始まっているため、学校教育の場においては、新しい人材を求めているからである。

ところが、一方で、現在、学校教育においては、様々な課題を抱えていることも事実であり、その例として、いじめ、不登校、校内暴力、無気力、高校中退、薬物乱用などがあり、その対応としても、多くの人々による意見もあり、文部科学省をはじめとする教育行政機関や民間機関としてもフリースクールなどで対応しているが、的確な解決策とはなっていない状況にある。このことに關して、その根底には、家庭や地域の教育力の低下、人間関係の希薄化、子どもの早熟化傾向、過度の学歴社会及び教員の力量低下等、正に、様々な要因が指摘されている。したがって、これらの問題は、学校のみならず、家庭を含めた地域社会全体で、対応しなければならない課題でもある。

しかし、何といたっても学校教育の場においては、教員一人一人の力量が期待され、現実に、ある程度までのことは、個々の教員の努力で解決できた例もあるのである。したがって、当面する課題に適切に対応でき、諸課題を解決しようとの情熱や能力が不可欠であり、それらは知識のみの試験では判断できかねるので、面接によることが重視されているのである。

①人物の総合的な評価

面接試験の主たるねらいは、質問に対する応答の態度や表情及び言葉遣いなどから、教員としての適性を判定するとともに、応答の内容から受験者に関する情報を得ようとするところにある。これは総合的な人物評価といわれている。

そのねらいを十分にわきまえることは当然として、次にあげることについても自覚しておくことが大切である。

- 明確な意志表示
- 予想される質問への対応
- 自らの生活信条の明確化
- 学習指導要領の理解
- 明確な用語での表現

②応答の基本

面接試験は、面接官の質問に応答することであるが、その応答に際して、心得ておくべきことがある。よく技巧を凝らすことに腐心する受験者もいるようであるが、かえって、紋切り型になったり、理屈っぽくなったりして、面接官にはよい心象を与えないものである。そこで、このようなことを避けるため、少なくとも、次のことは意識しておくことよい。

○自分そのものの表現

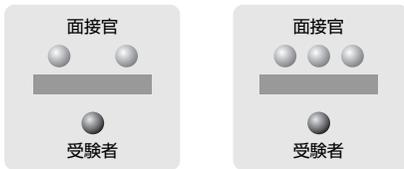
これまで学習してきたことを要領よく、しかも的確さを意識し過ぎ、理詰めで完全な答えを発しようとするより、学習や体験で得られた認識を、教職経験者は、経験者らしく、学生は、学生らしく、さっぱりと表現することをすすめる。このことは、応答内容の適切さということのみならず、教員としての適性に関しても面接官により印象を与えるものである。

個人面接・集団面接対策

面接の形式には様々な工夫があり、個人面接の前半で模擬授業を実施したり、グループで共同作業をさせたりと各都道府県でも毎年少しずつ変更している。具体的な内容は受験先の傾向を調べる必要があるが、ここではその基本的な形式として個人面接と集団面接について解説する。

■ 面接試験の形式

個人面接



■形式 面接官が2～3人程度

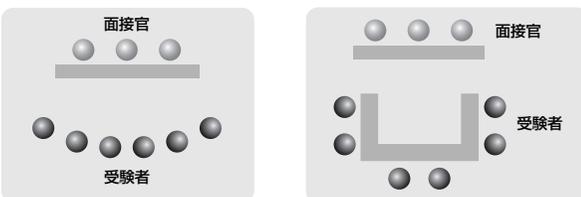
1対1の単独面接はあまり実施されず、複数の面接官の判断により、客観性を高めている。面接官の間で質問の内容や分野を分担している場合と自由に質問する場合がある。また、質問しているときにその他の面接官が応答の仕方や態度を観察することがある。最近では模擬授業を組み入れるところも多くなってきた。

■時間 10～20分程度

■特徴 受験者の個々の事情に即して質問することができ、問題点なども必要に応じて追求していくことができる。また、受験者の人柄をより深く理解することができ、個人的側面を評価するためには有効な方法としてほとんどの採用試験で実施されている。ただし、集団になったときの社会的な側面が判断しにくいことなどが難点として挙げられる。

■ポイント 答えるときには、慌てずにゆっくりと自分のペースで話すようにし、質問した面接官に顔を向けるようにする。

集団面接



■形式 受験者が5～8人程度で面接官が2～5人程度

同じ質問を一人ずつ順番に答えたり、質問内容が一人ずつ変わったりする。

■時間 30～40分程度

■特徴 質問内容は個人面接とさほど変わらないが、数人を同時に面接できるので時間が短縮でき、受験者の比較がしやすい。